

contents

「性感染症罹患者の性意識ならびに性行動様式に関する研究」報告(概要)……………	1	「ありのままのわたしを生きる」ために②……………	9
北丸雄二のニューヨークレポート②……………	8	今月のブックガイド……………	10
		JASEインフォメーション……………	11

「性感染症罹患者の性意識ならびに 性行動様式に関する研究」報告(概要)

一般社団法人日本家族計画協会 家族計画研究センター所長 北村 邦夫

はじめに

平成24年1月19日に「性感染症に関する特定感染症予防指針」の一部が改訂された。この指針には、「国は、性感染症を早期に発見し、治療に結び付けるための試行的研究、性感染症のまん延防止効果に関する研究、感染リスクや感染の防止に関する意識・行動等を含む社会面と医学面における性の行動様式等に関する研究」の重要性が指摘されている。

本研究班「性感染症罹患者の性意識ならびに性行動様式に関する研究」は、厚生労働科学研究費補助金・新型インフルエンザ等新興・再興感染症事業「性感染症に関する予防、治療の体系化に関する研究」(主任研究者 小野寺昭一 東京慈恵会医科大学客員教授)の分担研究として組織されたもので、「日本人の性意識・性行動に関する調査」を実施することを通して、国民の性感染症に対する認識レベル、性感染症の早期発見・早期治療を可能にする背景因子とは何か、性感染症に罹患するリスクな性

行動、コンドームの利用促進などを明らかにすることにより、性感染症予防教育の科学的かつ効果的な在り方を探ることを目的として実施した。

この目的を達成するために、研究班では、一般人口集団を想定したインターネット調査と、医療施設を受診者を対象とした調査を実施した。前者は15歳から69歳の男女8,700人(男性5,002人、女性3,698人)から、後者は筆者の組織する全国避妊教育ネットワーク会員などが所属する31施設から2,919人(女性2,824人、男性95人)から回答を得た。

ここでは、インターネット調査の結果を中心に、学校での性感染症予防教育が如何に重要であるかを明らかにしたので報告したい。

調査の概要

インターネットを使った「日本人の性意識・性行動に関する調査」は満15歳から69歳の DIMSDRIVE^(注) モニター(一部10代男女・60代女性については携帯モニターを使用)のうち満15歳から69歳の男女

表1 回答者の内訳

	男性	女性	合計		回答数
15 - 19 歳	120	152	272	北海道	406
20 - 24 歳	122	151	273	東北	444
25 - 29 歳	129	262	391	甲信越	260
30 - 34 歳	297	459	756	関東	3,821
35 - 39 歳	531	671	1,202	東海	917
40 - 44 歳	767	689	1,456	北陸	138
45 - 49 歳	868	528	1,396	近畿	1,568
50 - 54 歳	832	312	1,144	中国	378
55 - 59 歳	570	194	764	四国	210
60 - 64 歳	522	181	703	九州・沖縄	558
65 - 69 歳	244	99	343	合計	8,700
	5,002	3,698	8,700		

を対象に、平成 23 年 12 月 14 日（水）から 12 月 22 日（木）を調査期間として、アンケート依頼メールを各回答者に配信し web 上で回答してもらった。

（注）DIMSDRIVE（ディムスドライブ）とは、インターワイヤード株式会社が 1998 年 10 月から提供しているネットリサーチサービスのこと。全国偏りの無い回答モニター 70 万人（提携モニター 50 万人を含む）を保有している。

結果、調査配信数 187,617 人、回答数は 8,987 人、うち有効回答数は 8,700 人（男性 5,002 人、女性 3,698 人）であった（表 1）。回答者の平均年齢は 44.4 歳（男性 47.0 歳、女性 41.0 歳）。

なお、本研究を実施するにあたっては、疫学研究に関する倫理指針、臨床研究に関する倫理指針、個人情報保護法などを踏まえて、日本性感染症学会の倫理委員会からの承認を得ていることを申し添える。

性交経験者は 9 割を超え、同性との性交経験ありは 3.3%

1. 異性とのセックス経験

「異性とのセックス経験」がある者は 91.3%（男性 91.4%、女性 91.2%）。「今までに、何人の異性とセックスしたか」を聞くと、男性回答者では「5～9 人」27.5%が、女性では「1 人」が 17.7%ともっとも多かった。「100 人以上」が男性の 10 代でも 4.3%

おり、性行動の 2 極化が確実に起こっているように思われた。「決まった交際相手以外に、セックスする異性がいる」は 18.0%（男性 21.2%、女性 13.6%）であった。このうち、平均初交年齢は、全体で 20.5 歳（標準偏差 4.1 歳）、男性 20.7 歳（同 4.4 歳）、女性 20.1 歳（同 3.7 歳）。性交経験がある者に限るが、男女ともに初交年齢の低年齢化が目立っている。男性 10 代は 16.0 歳、女性 10 代 16.0 歳。男性については 50 代と 5.1 歳、60 代と 5.8 歳、女性では 50 代で 5.6 歳、60 代で 6.1 歳の開きがある。

「決まった交際相手（配偶者を含む）以外に、セックス（性交渉）する異性がいるか？」の質問には、「そのような人はいない」が 82.0%（男性 78.8%、女性 86.4%）で、「いる」は男性で 21.2%、女性で 13.6%であった。

2. 同性とのセックス経験

「これまでに同性とセックスしたことがあるか」には、回答者全体の 3.3%が「ある」と回答。男性では 4.0%（2.5%～4.6%）、女性では 2.5%（1.8%～3.0%）であった。

同性と初めてのセックスしたきっかけ（単一回答）は、「遊びや好奇心」が 40.3%（男性 45.7%、女性 28.8%）、「愛していたから」21.4%（男性 11.8%、女性 42.9%）、「ただ何となく」12.8%（男性 14.1%、女性 9.9%）などが上位に挙げられるが、男性では「遊びや好奇心から」が、女性では「愛していたから」がトップであり、性別による大きな違いが起こっている。

3. 金をはらって、金をもらってのセックス経験

恋人あるいは配偶者（妻あるいは夫）以外に、「お金をはらって」あるいは「お金をもらって」セックスしたことがあるかを尋ねると、「ある」が 32.2%（男性 52.2%、女性 4.9%）と男性では半数を超えていた。その傾向は年齢が上がるにつれ多く、50 代男性では 58.6%となっている。

一方、女性では若年層ほど経験率が高く、10 代の女性では 12.5%であった。

口腔性交は性感染症の温床となる

性交経験のある男女に、「口腔性交とは、男性の性器あるいは女性の性器を口で刺激すること」と定義した上で、「この1年間で、口腔性交の経験があるか」を聞いた。

「している(毎回している+時々している)」が全体の49.5%(男性54.4%、女性42.7%)、「していない(ほとんどしていない+していない)」は50.5%(男性45.6%、女性57.3%)。「毎回している」割合が多いのは、男性の30代(32.7%)、女性の10代(40.0%)。「していない」は男性の50代で38.2%、60代51.1%、女性も50代以上では大半が「していない」と回答している(図1)。

また、口腔性交を「毎回している」「時々している」「ほとんどしていない」と回答した方に、「口腔性交の際、性感染症を予防するためにコンドームを使うか」を尋ねると、「まったく使わない」が断然トップで、全体の82.8%(男性79.4%、女性87.9%)、「使うときと使わないときがある」までを加えると94.7%(男性93.9%、女性95.9%)であり、日本人には口腔性交にコンドームが必要であるとの認識はまったくないと言っていいことが明らかとなった。しかも、この傾向は男性では30代以上に多い(図2)。

「口は第二の性器」と呼ばれていることをご存じだろうか。膣には粘膜があって潤いが保たれている。性的興奮が起こると膣からの潤滑液が膣を潤すが、口も同様で、口腔粘膜に覆われていて、唾液が口の中を潤している。

これほど類似している器官なのだから、「エイズ(性感染症)予防にコンドームを！」は性器と性器の結合だけでなく、口と性器の行為でも当然であると考えべきなのに、これらの結果を見る限り、日本人はまったく無関心であるといえるだろうか。

それを如実に物語っているのが福岡県STD研究会の研究結果である(図3)。

口腔性交(オーラルセックス)が主として男性の性感染症の温床になっていることを教えるとも

図1 この1年間で、口腔性交の経験があるか

(口腔性交とは、男性の性器あるいは女性の性器を口で刺激すること)

(北村邦夫：「日本人の性意識・性行動調査」、2011)

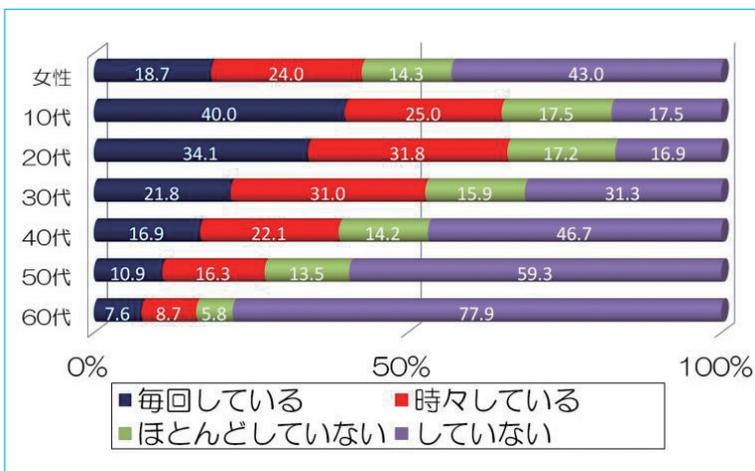


図2 口腔性交の際、性感染症を予防するため、コンドームを使うか？

(口腔性交を「毎回している」「時々している」「ほとんどしていない」と回答した方)

(北村邦夫：「日本人の性意識・性行動調査」、2011)

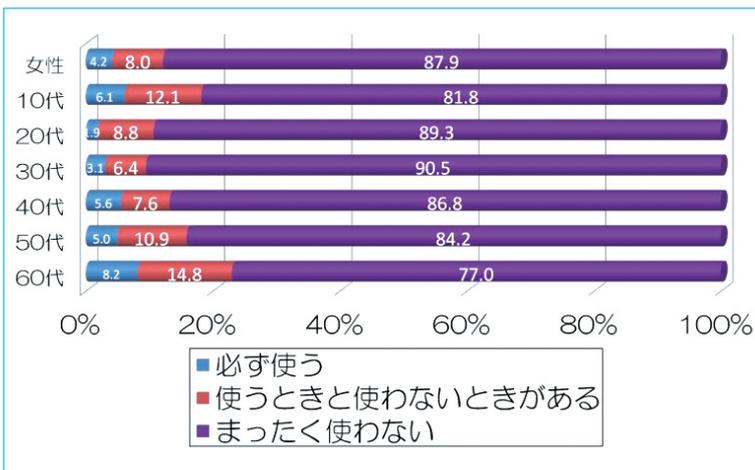
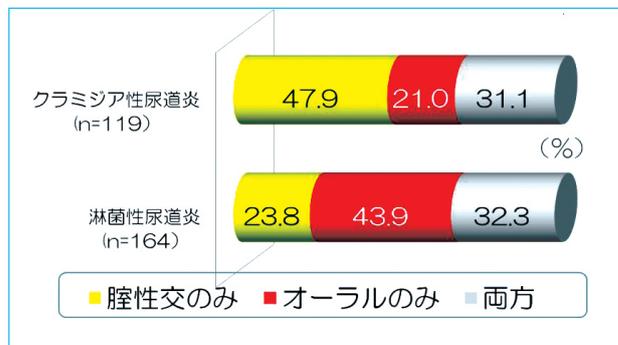


図3 男性尿道炎の病原体別 性交形態

(静岡県 STD 研究会、2001)



に、口腔性交用コンドーム(スイーツコンドーム)の利用を促す必要がある。

初交相手と知り合った場所、「職場やバイト先で」がトップ

「最初にセックス（性交渉）した年齢」を聞いた。平均初交年齢は、全体で20.5歳（標準偏差4.1歳）、男性20.7歳（同4.4歳）、女性20.1歳（同3.7歳）。性交経験がある者に限るが、男女ともに初交年齢の低年齢化が目立つ。男性10代は16.0歳、女性10代16.0歳。

1. 初交についての考え方

「最初のセックス（性交渉）をする前に、「初めてのセックス（初体験）」をどう考えているかについては、「重大だと感じていた（かなり重大だと感じていた+やや重大だと感じていた）」が全体の71.1%（男性64.6%、女性79.9%）。

この傾向は、男性では10代がもっとも高く79.2%、女性では40代以上では8割を超えている。初交の重大さには、男性と女性の年齢比較では逆転している。

2. 初交相手との知り合い方

「初めてセックス（性交渉）した相手（配偶者を含む）とどこで知り合ったか」を聞くと、もっとも多かったのが男女ともに「職場やアルバイト先で知り合った」で26.8%（男性25.4%、女性28.7%）。次いで「友人や先輩から紹介されて知り合った」が23.1%（男性21.3%、女性25.6%）。「塾、ゼミ、クラブ、サークル、ボランティア活動などで知り合った」が続く。

年齢による違いが顕著で、男性の10代は「友人や先輩から紹介されて知り合った」が33.3%でトップ、「もともと幼なじみであり、その人に好意をもつようになった」が29.2%と続く。男性の20代は「塾、ゼミ、クラブ、サークル、ボランティア活動などで知り合った」、「友人や先輩から紹介されて知り合った」の順。女性の10代は「友人や先輩から紹介されて知り合った」25.6%、「携帯電話やパソコンメールを通して、知り合った」20.0%。特に、「携帯電話やパソコンメールを通して、知り合った」については男女とも20代までに目立っている。

3. 初交のきっかけ（単一回答）

「初めてセックス（性交渉）をするきっかけ」を聞いた。「愛していたから」が全体の51.0%でトップ。これは男女とも同様に、男性の44.2%、女性の50.3%が回答していた。男性では第2位が「遊びや好奇心で」29.7%、次いで「ただなんとなく」12.1%。女性では「ただなんとなく」12.1%、「遊びや好奇心で」11.8%の順。

年齢をみると、男性の10代は「愛していたから」が66.7%、「遊びや好奇心で」16.7%。年齢が上がるに伴い「愛」が低下し、「遊び」が増える傾向にある。女性では高年齢ほどに「愛」の割合が高い。

4. 出会ってから初交が行われるまでの期間

「初めてのセックス（性交渉）した相手と、出会ってからセックス（性交渉）するまでの交際期間」を尋ねると、「3カ月未満」が23.2%と第一で、「1カ月未満」17.1%、「6カ月未満」14.6%、「1日（出会ったその日）」13.5%の順。男性では「3カ月未満」「1日（出会ったその日）」、女性は「3カ月未満」「1カ月未満」「6カ月未満」の順。

男性の50代、60代は「1日（出会ったその日）」が最多で、それぞれ21.4%、23.6%。その一方、女性の10代では「1日（出会った日）」が15.0%と他の世代に比べて極端に早い結果であった。

5. 初交時のコンドーム使用

「初めてのセックス（性交渉）のときコンドームを使ったか」に対しては、51.7%（男性51.7%、女性51.7%）が「使った」と回答したものの、「使わなかった」も37.1%（男性40.8%、女性32.0%）もいた。

初交時のコンドーム使用は、男女ともに若年齢ほど「使った」割合が高く、10代の男性は79.2%が、女性は72.5%が「使った」と回答しているのに、60代の男性では34.2%、女性では25.0%と低率であった。

43.2%が性感染症予防のためにコンドームを使用

「コンドームを使うことについての考え」を複数回答で聞いた。回答者全体では「安心できる」が51.3%とトップ、次いで「マナーである」44.3%、「相

手からの愛情（相手への責任）を感じる」23.3%、「面倒くさい」21.7%と続く。「安心できる」は男女ともに高いが、男性では「マナーである」37.6%、「面倒くさい」28.5%、「気持ちよくない」21.9%。女性は「安心できる」58.8%、「マナーである」53.4%、「相手からの愛情（相手への責任）を感じる」36.7%の順。

年齢比較では「安心できる」「相手からの愛情（相手への責任）を感じる」が男女とも若年齢ほど高く、「気持ちよくない」が10代、20代の女性で、「かっこ悪い」が10代の男性で8.3%、20代3.9%、30代2.2%で概して高い。

1. 決まった交際相手とのセックスでのコンドーム使用（この1年間）

「この1年では、決まった交際相手（配偶者や同性の相手を含む）とのセックス（性交渉）でコンドームを毎回使っているか」を尋ねた。「1年以内に決まった交際相手とセックス（性交渉）をしていない」が34.3%（男性34.4%、女性34.0%）、「妊娠を望んでいるので使っていない」が6.0%（男性3.7%、女性9.0%）いるものの、「必ず使っている」は19.8%（男性21.2%、女性18.0%）。

「必ず使っている」は男女ともに若年齢に多く、男性の10代では66.7%、20代39.0%、30代30.3%、女性の10代52.5%、20代27.7%、30代20.6%であり、妊娠から解放された世代が、コンドームの使用に消極的であることがわかる。女性の20代、30代は「妊娠を望んでいるので、使っていない」割合が高い。

2. 決まった交際相手以外とのセックスでのコンドームの使用（この1年間）

「この1年では、決まった交際相手（配偶者や同性の相手を含む）以外とのセックス（性交渉）でコンドームを毎回使っているか」を尋ねると、「決まった交際相手（配偶者や同性の相手を含む）以外とのセックス（性交渉）はない」が70.9%（男性61.4%、女性83.9%）と大半を占めているが、「必ず使っている」が12.1%（男性17.2%、女性5.0%）でこの傾向は若年者ほど高い。

3. コンドームを使っている理由（複数回答）

現在コンドームを使っていると回答した方に、「コ

ンドームを使っている理由は何か」と尋ねると、「確実な避妊法だと思うから」が65.7%（男性65.9%、女性65.4%）と第一位を占め、「性感染症予防のため」43.2%（男性46.9%、女性36.7%）、「安心できるから」37.1%（男性34.8%、女性41.2%）が上位を占めている。

「確実な避妊法だと思うから」は全年齢層に共通しているが、「性感染症予防のため」の意識は10代の男性では76.2%、10代の女性で72.4%と極めて高く、若い世代に「コンドームは性感染症予防の用具」の意識が浸透していることが考えられる。「安心できるから」も若年層ほど高い。

4. コンドームを使わないという回答者は性感染症についてどう感じているか

現在コンドームを使わないことがあると答えた方に、「性感染症に対して、どのように感じているか」を聞くと、「自分には関係ないとは思わないが、危機感はない」が最多で67.8%（男性65.5%、女性71.2%）。「自分とは関係ない」は男性の10代が37.5%と多く、女性では年齢が上がるにつれ「自分とは関係ない」との認識を持つ例がある。

「身近に感じており、危機感がある」は男性の20.3%、女性では14.8%であるが、女性では若年齢層ほど「危機感」があるものの、男性では「自分とは関係ない」が10代で37.5%を占めている。

学校での性感染症予防教育が及ぼす影響とは

「あなたは学校教育で性感染症の予防方法について聞いたことがあるか」と尋ねると、「覚えていない」が25.4%（男性21.5%、女性30.6%）を占めていたが、「ない」は52.3%（男性59.6%、女性42.5%）、「ある」は22.3%（男性18.9%、女性26.9%）となっていた。学校で性感染症予防を受けたことがあるは、男女ともに若年齢ほど多く、10代の男性では75.8%、女性80.3%、20代の男性は75.8%、女性54.7%となっていた（表2）。

学校で性感染症の予防方法について聞いたことのある方が、その後どのような意識・行動をとるかに注目し各種クロス集計を試みると、以下、学校教育

表2 学校教育で性感染症の予防方法について聞いたことがあるか？

(北村邦夫：「日本人の性意識・性行動調査」、2011)

	合計	ある	ない	覚えていない
全体	8,700	22.3	52.3	25.4
男性	5,002	18.9	59.6	21.5
10代	120	75.8	9.2	15.0
20代	251	55.0	19.1	25.9
30代	828	26.7	47.2	26.1
40代	1,635	15.6	62.9	21.5
50代	1,402	13.2	65.9	20.9
60代	766	7.3	75.3	17.4
女性	3,698	26.9	42.5	30.6
10代	152	80.3	4.6	15.1
20代	413	54.7	16.7	28.6
30代	1,130	29.0	37.3	33.6
40代	1,217	18.0	48.4	33.6
50代	506	14.2	57.7	28.1
60代	280	10.0	68.2	21.8

の重要性を示唆する貴重なデータが明らかとなった。ここでは、学校教育に着目するために、30歳未満について絞り込んで解析した。

1. 学校教育が性感染症予防としてのコンドームの使用を徹底させる。

「学校教育で性感染症の予防方法について聞いたことがあるか」と「この1年間で、決まった交際相手とのセックスでのコンドーム使用」をクロス集計した。その結果、男女ともに「ある」群では、(コンドームを)「必ず使っている」の割合が有意に高い(図4)。

2. 学校で性感染症を学ぶと初めてのセックスを重要だと感じさせる。

「学校教育で性感染症の予防方法について聞いたことがあるか」と「初めてのセックスをどのように感じていたか」をクロス集計した結果、「重要だと感じていた」割合は、男女ともに、「聞いたことがある」群で多い傾向があった(図5)。

3. 学校で性感染症を学ぶと性感染症に危機感を覚える。

「学校教育で性感染症の予防方法について聞いたことがあるか」と「性感染症に対してどのように感

図4 学校教育が性感染症予防としてのコンドームの使用を徹底させる

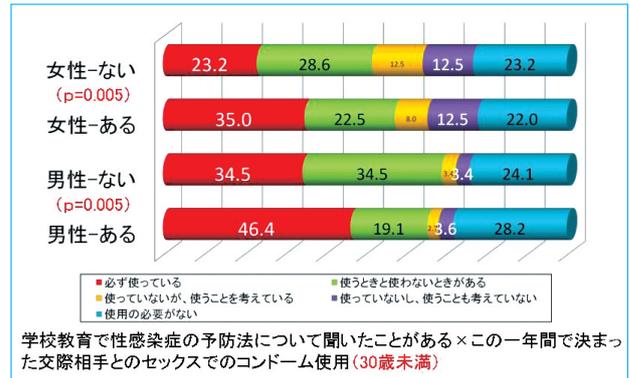


図5 学校で性感染症を学ぶと初めてのセックスを重要だと感じさせる？

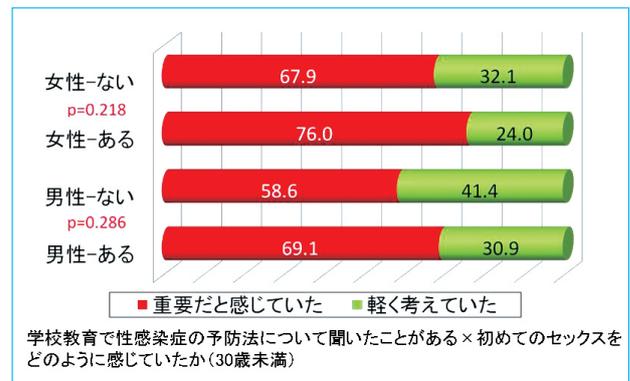
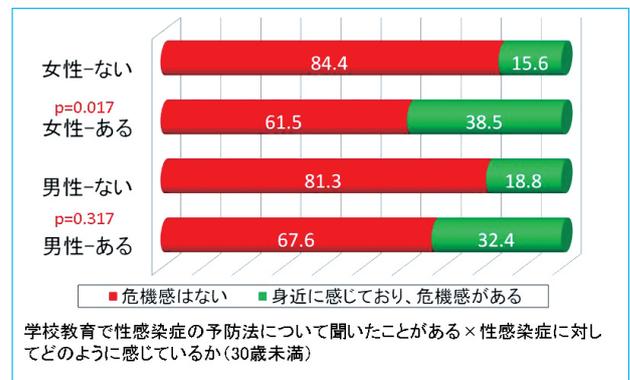


図6 学校で性感染症を学ぶと性感染症に危機感を覚える？



じているか」をクロス集計した。女性では「ある」群は「身近に感じており、危機感がある」は38.5%で「ない」群15.6%との間で有意に多い。

男性では、それぞれ32.4%と18.8%で統計的には差がない(p=0.317)(図6)。

4. 学校で性感染症を学ぶと、性感染症予防のためにコンドームを使うようになる。

「学校教育で性感染症の予防法について聞いたことがあるか」と「コンドームを使っている理由」をクロス集計した。「聞いたことがある」群と、「ない」

群との間には違いが認められた。特に、コンドームの使用を「性感染症予防のため」と「安心できるから」で顕著であった（表3）。

近年、学校における性教育の在り方が議論されており、性教育に対して消極的な自治体なども散見される。しかし、今回の調査研究において、学校教育の中で性感染症の予防方法を学ぶ期待があった若い世代（30歳未満）は、コンドームに対する認識を高め、性感染症予防としてのコンドームの有効活用に積極的になれることを明らかにした意義は大きい。

まとめ

今回は、本研究班が実施したインターネット調査の結果を中心にその概要をまとめたが、性感染症の早期発見・早期治療のためには、医療機関との関わりが不可欠である。ここでは、研究班としての興味深い結果を踏まえて、性感染症の早期発見・早期治療に結び付けるだけでなく、性感染症予防策として有効だと思われる取り組みを以下箇条書きにした。

1. 学校における性教育ならびに性感染症予防教育の充実を

学校教育において、性交の意味、初交に向けた準備、口腔性交の課題、コンドーム使用の意義、性感染症の特徴などを科学的・具体的に学ぶ機会を作る。これによって、初交を「重大なこと」と認識させ、性感染症予防としてのコンドームの使用を徹底させることができるようになる。性感染症の検査を受けようと思った一番のきっかけは「気になる症状がある」であった。

しかし、多くの性感染症はHIVやクラミジア感染症などがそうであるように無症候であることが一般的である。性交経験があるならば定期的な検査を、パートナーがかわったときには検査を必須とする教育が求められている。これらは、学校に限らず社会教育の中でも取り上げて欲しい話題である。

2. 医療機関における性感染症予防教育の徹底を

性感染症の早期発見・早期治療はいずれにせよ検査が可能な医療機関での受診が不可欠である。一般人口集団では「どこに行って検査をしたらいいかわ

表3 学校で性感染症を学ぶと性感染症のためにコンドームを使うようになる

	男性 ある	男性 ない	女性 ある	女性 ない
性感染症予防のため	68.8	25.0	62.0	30.0
確実な避妊法だと思うから	67.5	62.5	64.5	60.0
相手が使っているから	5.0	12.5	14.9	13.3
コンドーム以外の避妊法を知らないから	10.0	12.5	9.1	6.7
値段が安いから	25.0	12.5	23.1	30.0
どこでも手に入りやすいから	23.8	16.7	43.0	30.0
安心できるから	52.5	12.5	51.2	33.3
よく使われているから	26.3	8.3	37.2	23.3
なんとなく	2.5	4.2	0.8	0.0
その他	2.5	0.0	2.5	3.3

学校教育で性感染症の予防について聞いたことがある×コンドームを使っている理由（30歳未満）

からない」と回答する者が少なくなかった。また「今まで受診したことのない診療科（婦人科・泌尿器科）に行くことがこわい」「どのような検査をされるのか不安」「異性の医師・スタッフに診られることに抵抗がある」など、医療機関が受診しやすい環境を整備することが重要であることを示唆する結果となっている。

医療機関におけるホームページを充実させて、受診しやすい情報提供、スタッフ紹介、性感染症検査・治療の具体的な方法、検査や治療経費などわかりやすい情報の提供が求められている。また、電話をかけてきたときの対応方法、受診した際にスタッフのフレンドリーな対応などを心掛け、不安や心配を払拭できるような体制を整えておくことが重要である。さらに、性感染症罹患者のパートナーに対する検診・治療を積極的に促すよう心掛けていただきたい。

3. メディアからは科学的・具体的な情報提供を

無症候の性感染症が大半であること、性感染症の検査・治療は医療機関で行うこと、口腔性交に際しての留意点、特にコンドームを使用することが性感染症の拡大を阻止するために重要であること、性感染症に罹患した場合には、当事者だけでなくパートナーの検診・治療が推奨されることなどを折に触れて情報提供して欲しい。

LGBT人権で飛躍的な進展 ——2012年を振り返る——

1969年のストーンウォール暴動以降、アメリカの性的少数者運動は様々な浮沈を経験してきましたが、2012年は確実にその最も飛躍的な1年でした。その1年をここに記録しておきましょう。

*

①同性婚支持が急拡大、初めて過半数に

米国の世論調査で軒並み同性婚支持率が過半数を超えました。史上初めてのことです。ABCニュースとワシントンポストの調査では53%が同性婚合法化に賛成で、かつ39%が「強く」支持すると表明しました。これまで「反対」層が多かったカトリック信者やストレート男性でも支持が増えており、さらにはカトリックの多いラティーノ層でさえ支持層が過半数に達したようです。ちなみに、同性婚支持は20年前にはわずか20%、10年前でも32%に過ぎませんでした。

②米大統領が史上初めて同性婚支持表明

①の世論の変化を背景にバラク・オバマが5月、米大統領として史上初めて同性婚を支持するとテレビで表明しました。米国では結婚は連邦政府ではなく州政府の管轄なので大統領の賛成がすぐに結婚制度の変更につながるわけではないが、時代の潮目として象徴的な出来事でした。オバマの支持表明にはその先駆けとして国務長官ヒラリー・クリントンがすでに前年12月に国連で演説した有名な「Gay rights are human rights (ゲイの権利は人権の問題だ)」宣言があったことは言うまでもありません。

③民主党が党綱領でも明記

そしてこれが大統領選挙の年の米民主党の党綱領に「We support marriage equality and support the movement to secure equal treatment under law for same-sex couples (我々は結婚権の平等を支持し、同性カップルへの法の下での平等な待遇を保障する運動を支持する)」と書かせたのでした。米二大政党の綱

領ではこれも史上初のことです。

④大統領選挙のカギを握ったLGBT票

11月の選挙では③の綱領を持つオバマ大統領が再選を果たしました。オバマは選挙人数では332人 vs 206人と大勝でしたが、実際の得票数では6171万票 vs 5850万票と、わずか321万票差でした。つまり2.67%ポイント差の辛勝だったのです。

ところで今回選挙の出口調査では全投票者中ほぼ5%が自らをLGBTだと公言しました。この票は約600万票に相当します。同じ出口調査でLGBTの76%がオバマに投票していたことがわかりました。対してロムニーに投じた人は22%でした。ストレート票はともに49%とほぼ同率でした。これを計算すると、オバマに投票したLGBT有権者は600万票のうちの76% = 474万人、対してロムニーには22% = 120万人。その差は354万票になります。これは、全得票数差の321万票をちょうど上回る差です。特に選挙を決めた激戦州 = 最重要州のオハイオとフロリダの両州では、ストレート票だけではロムニーの方が勝っていました。これまで大都市部で強かったのLGBT票は、いまや都市部を越えて複数州でも拡大していることがこれで明らかになったのです。言葉を換えればLGBT票がオバマを勝たせたと言えるのです。

⑤住民投票での初の同性婚合法化

選挙と同時に行われた住民投票でも、ミネソタ州では結婚を「男女間に限る」と州憲法で規定しようとした試みが否決され、メイン州、メリーランド州、ワシントン州では同性婚合法化支持が過半数を獲得しました。米国ではこれまでも同性婚合法化州が存在していますが、それらはいずれも裁判所などで決められたもので、今回のように住民投票で決まったのはこれも米史上初めてのことです。ワシントン州ではすでに同性婚は認められていましたが、メイン州では12月29日から、メリーランド州では1月1日から同性婚の婚姻届が受理されています。

きたまるゆうじ ニューヨーク在住(19年)ジャーナリスト/作家/
元・中日新聞(東京新聞)ニューヨーク支局長。

「ありのままのわたしを生きる」ために



第22回

「土肥」と「いつき」が出会う時

土肥いつき

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のMtFトランスジェンダー。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

2学期の最後の授業。生徒たちと雑談をしていると、ある女の子が「先生、どんな男の人がタイプなん？」と聞いてきました。とっさに「ラグビー選手かな」と答えると「わかるー！」と、その場は盛りあがって終わったのですが…。なぜあの時「女の人が好きやねん。レズビアンやねん」と言わなかったのかなあと、なんとも言えない後悔の念がわきあがってきました。

閑話休題。

「全国キリスト教学校人権教育研究会（略称全キリ）」というキリスト教主義の学校の教員やキリスト者の教員たちの集まりがあります。わたしがはじめて全キリの集まりに参加したのは1990年に大阪で開催された第1回「キリスト教主義」学校解放教育交流集会でした。キリスト教に一種のあきらめを感じ、教会から遠ざかっていた当時のわたしにとって、「キリスト者であるからこそ人権教育を」というこの会の存在は、大きな驚きでした。ところで、全キリの特徴的なことは、特定の人権課題をテーマとするのではなく、さまざまな人権課題を扱っているということです。ですから、全国セミナーでは在日外国人や部落問題そして平和問題などさまざまな分科会がもたれます。

1993年に京都で開催された第4回全国セミナーの在日外国人の分科会で、わたしは当時の実践についてレポートする機会を与えられました。それ以降、わたしは全キりに運営委員として積極的にかかわるようになりました。当時の全キリの全国セミナーは、参加者がひとつの宿舎で雑魚寝をしながら、夜を徹して語りあっていました。わたしもその中に混じって、在日や部落のことについて、時として攻撃的とも言える論調で、熱い議論をしていました。1997年にセクシュアルマイノリティについて知ったわたしは、全キりにこの問題を扱うよう提起するようになりました。

そして、1999年に大阪で行われた第10回全国セミナーで、はじめてセクシュアルマイノリティをテーマにした分科会がもたれました。当日はOLP^(注)の方々を中心に4人の発題者がありました。わたしはこの分科会への参加をきっかけに、自分がトランスジェンダーであることを全キリ

でカミングアウトしようと思いました。実はそれ以前に、一部の運営委員の人には「男性」の姿のままではありましたが、カミングアウトしていましたが、やはりきちんと望みの性別の姿でカミングアウトしたいという思いがありました。一方、長く「男性」としてかかわってきた全キリで、果たしてトランスジェンダーとしてのわたしを受け入れてくれるのだろうかという不安もありました。

それでも、用意したレディースの服を着て、慣れないメイクをして、分科会に参加しました。幸い、発題者の人たちも司会者の人たちも知りあいなので、自己紹介の時間に少し時間をもらって自分の話をしました。分科会終了後、参加者の人たちから暖かい言葉をもらって、少し気持ちが落ち着きました。

全国セミナーでは、分科会の後、参加者全員の懇親会があります。ここには部落問題や在日問題など、前年までわたしが「男性」として参加していた分科会のたくさんの友だちがいました。とても緊張しましたが、最初にかミングアウトした運営委員の人の助けを受けて、「女性の格好」で参加しました。そこでの反応は対照的でした。女性の参加者はとても暖かく迎え入れてくれ、男性の参加者はとまどいの色を隠せない表情でした。それでも、一晩をそうやって過ごし、翌日、セミナーの2日目に参加しました。

2日目の反応は、1日目の反応とはまったく違いました。ある男性は「去年まであなたが怖かった。でも、今回は最初に会った時からそうは感じていなかった」と言ってくれました。あるいは、「昨日たいへんなことを言ってくれたんだね。ありがとう」と声をかけてくれた人もいました。さらに、長く一緒に運営委員をしていた女性は「いままではあまり話をする気がしなかった。5分もしゃべるとしんどくなって、実は逃げていた。こんなにゆっくり話ができしたのははじめてだね」と言いながら、頭を抱いてくれました。ほんとうにカムアウトしてよかったと思った瞬間でした。

全キリでのカムアウトは「土肥」というわたしと「いつき」というわたしの統合の第一歩だったと思います。

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

生殖技術はひとを幸福にするか？

これまで生殖技術について、議論が避けられがちだった数々の問題点を、膨大な知識や情報を整理し批評的に伝える労作。医療は“善”という幻想のもと、医療が新たな欲望や市場を生み出している。不妊への無知や偏見、差別が、不妊治療へ背中を押す。性交から切り離された受精が可能になり、引き起こされる女性の身体の資源化など、新たな倫理的問題……。生殖技術と女性の身体を中心に、本来、病気ではないものに病名が与えられ、「治療」の対象となる「医療化」の現状などを、緻密に論じている。

著者は明治学院大学社会学部教授で、医療人類学、生命倫理学を専攻する。不妊の人たちの自助グループ「フィンレージの会」の設立と運営に携わり、当事者の生の声に多数ふれてきた。生殖医療に携わる医師や不妊当事者へのインタビュー調査も、国内外で実施してきた。

著者が生殖技術と社会・文化の関係を研究し始めた20年以上前には、今では、知ろうと思えば容易に知り得る体外受精の成功率の低さや副作用に言及しただけで、“反対派”のラベルを貼られたという。時代よりも一歩先んじて、問題点を指摘し続けてきた。

不妊治療を希望する女性は、苦痛を伴う屈辱的な数々の検査を受け、ホルモン薬で管理され、性交日も指定される。できなければ人工授精や体外受精、顕微授精、提供精子……。経済的にも、心身の負担も大きい。40代以降、卵子が老化して妊娠が困難になり、以前ならあきらめていたが、今では提供卵子や代理出産などの選択肢がある。海外渡航して治療を受けるカップルもいるが、その実態は不明。不妊治療中の人たちから「あきらめたいのにあきらめられない」という声が多く聞かれる。あきらめるのにも、力が要るのだ。

なぜ不妊に苦しむのか？ 著者は「母性本能が満たされない」や「跡継ぎを産めとする家父長制度の圧力」とす



生殖技術

不妊治療と再生医療は 社会に何をもたらすか

柘植あづみ著

みすず書房

3,360円（税込み）

る見解だけでは、不妊の複雑な諸相は理解できないと考える。「不妊という状態が存在すること」や「不妊がスティグマであること」、差別があること。「不妊治療そのものが不妊の苦痛を強めていること、不妊治療が自己身体を疎外し、自己評価を低下させること、不妊治療が不妊の根本的解決策ではなく問題を先送りにする事」などの絡み合いを理解することが必要だという。この部分は特に、本書の真骨頂といえる。

加えて「子どものいない人生のロールモデルが増える」、自助グループや不妊経験者が「不妊に直面してもいろいろな生き方があることを見せる」「多様な性の存在が受け入れられ『女』・『男』の意味を変える」「親子の絆の形成は生物学的なものだけによらないことを見せていく」などの解決策も提案している。

再生医療にも多くのページを割いている。京都大学・山中伸弥教授が研究するiPS細胞に先んじて期待を集めたES細胞の研究材料に、卵子や受精卵が使われ、生殖技術と密接な関わりがあるのだ。

私自身、2006年7月、文科省生命倫理・安全対策室の要請で、「特定胚及びヒトES細胞研究専門委員会」下に設置された「人クローン胚研究利用作業部会」の公聴会に招かれた。卵子提供の可能性のある婦人科がん患者会関係者としてだった。まだ研究段階にもかかわらず、同席した脊髄損傷の青年の過大な期待や、婦人科腫瘍医の研究協力への前のめりな積極性に、違和感を覚えた。自分が危惧を表明して、彼らを落胆させたことが心苦しかった。「人助け」「利他的な行為」への圧力も感じた。著者の、提供の意志の背後にある「ジェンダー関係や力関係、政治性を不断に検証していく必要がある」という考え方に共感する。

違和感や疑問から一つ一つ社会的・文化的意味を問い直す大切さを、本書は教えてくれる。また「半養子」「ドナーの人間化」など新しくふれた用語も多かった。巻末の用語解説や索引、註など丁寧な本づくりが、理解を助けてくれる。
(フリーライター まつばら けい)

▶▶ 東京性教育研修セミナー 2013 ◀◀

～若者の性行動は今後どう変化していくのか？～

3月20日（水・祭日）13:00～17:10（受付12:30）

青少年の性行動の日常化と分極化

～「第7回青少年の性行動全国調査」からみえてくるもの～

日本性教育協会（JASE）では、1974年よりほぼ6年おきに全国の青少年の性行動・性意識について調査してきた。今回は2011年に行われた第7回調査の分析をもとに、青少年の性行動と性意識の現状を報告する。そのなかで、この37年間における青少年の生活環境の変化と性行動の変容との関連、また情報化社会のなかで青少年のメディア利用と性行動との関連を探る。さらに、性関係のあり方と性意識との関連、性的被害や性教育と性意識・情報が青少年にどのように受けとめられているかについて検討を行う。

内容 講演「性行動調査の意義と今後の課題」片瀬一男（東北学院大学）、「欲望の時代からリスクの時代へ～性の自己決定をめぐるパラドクス」高橋征仁（山口大学）、「青少年の家庭環境と性行動」石川由香里（活水女子大学）、「消極化する高校生・大学生の性行動と結婚意識」渡邊裕子（駿河台大学）、「性教育・性情報源と性知識」中澤智恵（東京学芸大学）、ディスカッション・Q & A「若者の性行動は今後どう変化していくのか？」。

会場 文京シビックセンター 26階スカイホール（東京都文京区春日1-16-21）
東京メトロ「後楽園」駅徒歩1分、都営地下鉄「春日」駅徒歩1分、JR総武線「水道橋」駅徒歩9分

参加費・問合せ先等

主催 日本性教育協会・「第7回青少年の性行動全国調査」調査委員会。

参加費 1,000円（当日受付でお支払いください。資料代含む）。**定員** 90名（先着順・予約制）。

申込方法 「氏名、住所、電話番号、メールアドレス、所属、職業」を明記して、FAXまたはメールでお申し込みください。折り返し、地図の入った参加票をお送りします。JASEホームページの応募フォームからお申し込みいただけます。

<http://www.jase.faje.or.jp/support/jasstokyo.html>

問合せ先 〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビルB1 財団法人日本児童教育振興財団内 日本性教育協会事務局
E-mail: info_jase@faje.or.jp FAX: 03-5800-0478 〈お問い合わせ電話〉03-6801-9307

JASE 性教育・セクソロジーに関する資料室

資料室について

JASEは国内外の性教育、性科学等に関する文献資料を収集している開架式資料室です。文献資料の数は約5万点以上、現在も日々、増え続けています。性教育、セクソロジーに関する調査、研究のためにご利用いただけます。人間の性に関心がある方、ぜひ足をお運びください。

【閲覧】必ず事前に電話で予約が必要です（tel 03-6801-9307）。貸出業務は行っていません。

【開室日・時間】月～金曜日 10:30～17:30

【休室日】土・日曜日、祝日、年末年始 ※その他、会議等で臨時に休室することがあります。

【コピーサービス】コピー料金は用紙サイズにかかわらず1枚10円です。著作権法の許容する範囲で行うものとします。

<http://www.jase.faje.or.jp/pub/archive.html>

資料室 利用方法

収集文献 ・資料

統計・調査報告書、ジェンダー・フェミニズム、性教育一般・性教育の歴史的資料、国内雑誌、障害者、セクソロジー（自然科学系、人文・社会学系）、民俗学・文化人類学・風俗、性研究史・性学史、教科書・指導書・学習指導要領、幼児期～青年期、国内学術誌、国際（海外団体資料・海外学術誌）、高齢者・家族問題、文学・評論・エッセイ・文庫・新書、官公庁資料、JASE刊行物、映像資料、個人論文、雑誌記事、新聞記事、絵本・写真集・マンガ、江幡・篠崎・朝山・石川・ダイヤモンド文庫、ほか。

<http://www3.jase.faje.or.jp/cgi-bin/search1.cgi>